



『文学は地球を想像する —エコクリティシズムの挑戦』

結城正美 著

岩波書店 刊

定価 1,056円 (本体960円+税)

私たちは環境問題を遠い他人事として捉えてしまうが、地球環境が人間にもたらす苦悩や喜びが書かれた文学作品を読むと、物語の人物に心を動かされ、環境に対する当事者意識を持つようになる。本書は、そうした読み手に共感を抱かせる文学作品を取り上げ、エコクリティシズムという環境視点の文芸批評方法を用いて内容を解きほぐしている。

著者が解析する文学作品は多彩だ。自然に身を置くことで人間社会を見つめ直すネイチャーライティングの歴史変遷を詳論し、『森の生活』のソーヤや『野生のうたが聞こえる』のレオポルドが自然の感覚を読み手に伝えるために駆使した高度な修辭的技巧を評価しているのが興味深い。また、石牟礼道子の『苦海浄土』で描かれた漁民が、水俣病発症後に獲った魚が汚染されていると分かっても食べることをやめられなかったということに、著者は海と漁民と

の人智を超えた魂の共鳴を見て「水銀汚染によっても切れないいのちのつながり」と表現している。人間の命は個々のものでありながら、同時に地球を循環する生の一部でもあるのだと説く。

著者が分析を通じて私たちにもたらすのは新しい視座だ。小林エリカの『マダム・キュリーと朝食を』やアレクシエーヴィチの『チェルノブイリの祈り』を、半減期が何万年にもなる放射性物質がとりまく世界での人間の時間・空間感覚再調整の試みと評釈した。人間とロボットの共生世界を描いたカズオ・イシグロの『クララとお日さま』は優しさを軸とした未来の異種混淆的世界であると教えてくれる。

人間は地球の一部だ。地球を所持しているのではない。警告の色も帯びた本書を読んでいるとそんな思いが強くなり、人間の傲慢な生が胸にこたえる。同時に、地球の命のつながりに自分も入っていると気づかされ、孤独でないことに安堵もする。懐が深い本だ。(日本農業新聞 齋藤^{さいとう}花^{はな})